

1 「サーカスのライオン」を読む

一 はじめに

「町はずれの広場に、サーカスがやつてきた。……」

冒頭の一一行に私の幼い日の思い出は甦ります。

○旅のつばくる さみしかないか／おれもさみしい

サーカスぐらし／とんぼがえりで 今年もくれて

知らぬ他国の花をみた

○朝は朝霧 夕べは夜霧／泣いちやいけない クラ

リオネット／ながれながれる 浮きもの花は／明

日も咲ましよ あの町で

昭和六年ドイツのハーレンベック動物園のサーカス
団が来朝した時に作られた流行歌です。それ以前は、

サーカスという語はなくて、曲馬団（チャリネ）とい
われていたようです。サーカス（c i r c u s）とは、
円形競技場の意味です。テントを使つて移動するのは、
映画でおなじみの米国のリングリングサーカス（汽車
で米大陸を移動）やミルズブラザーズ（トラックをつ
らねて米大陸を移動）が有名です。チャリネとか曲馬
団とかサーカスとか言つていたことばが、サーカスと
いう語になつたのは、昭和六年以降のようです。

この頃に、「サーカスの唄」が流行しました。

私は当時五歳、大人が口ずさんでいるこの唄を三番
まで覚えているのですから日本中に流行つたものと思
います。

サーカスの唄と共に、私の町にも春秋の互市の三日
間、サーカス小屋が立ちました。割引券と五銭白銅貨
をにぎりしめて、胸をはずませて出かけたことを思
出します。

子供はサーカスが好きです。荒れた広場は、ふだん
は野球やかくれんぼや陣どりなどの遊び場ですが、そ
の広場に、ある日、テント小屋が掛けられます。若い
衆が丸太をわら繩で手際よくしばりながら小屋を作つ
ていきます。その身軽さに子供は目をみはつて感心し
ます。

また、サーカスの綱渡りにでてくる、小学生ぐらい
の女の子の可愛らしさに、すっかり魅せられます。サ
ーカスが終わつてからも、テントのまわりをうろうろ
している子がいました。その女の子は、夜になると酔
を茶碗で二杯飲ませられて、逆立ちをさせられたり、
鞭で叩かれたりするのだ、そんな話を大人から聞かさ
れて、子供の中には、わざわざテントを覗きにいった
子もいました。親方に鞭で叩かれ、その悲鳴でも聞こ
えたら、その女の子は攫われてきたに違ひないから、

警察に報せてあげようと思つてのことです。これは、

勇気のいることで、万一、覗いているところを見付けられたら自分が捕まつて、酔を飲ませられて、鞭で叩かることになるからです。臆病な私はそんなことは、とても恐ろしくてできませんでしたが、勇気のある岩

出山の男の子は、可愛らしいサークスの女の子の魅力にひかれ、本気になって夜のテントを覗きに行つたのかもしれません。そんなことは大人が子どもに聞かせたでまかせの嘘なのですが、子どもたちは案外本気にしていました。

私が今でも残念に思うことは、古川市にシバタサークスが来たとき、連れていつて見せてもらえなかつたことです。戦後、教師になつてから、木下サークスを見にいつたことがあります。子どものころに五銭で見たサークスよりも、はるかに大規模のサークスでしたが、幼い頃の感動は、ふたたび戻つてはきませんでした。

サークスは、子どもの夢であり、あこがれです。

(ロシアでは、サークスは、子どもに「大胆・細心

・勇気の人生」を教えるものとしている：ポリショイサークスのプログラムより) やはり、サークスは子どもの頃に見るべきものかもしれません。

二 教材をよむ

子どもは、人間の芸にも動物の芸にも、同じように大きな拍手をおくります。恐ろしい猛獸の芸でも、美しい衣裳の出演者の芸でも、子どもにとつてはかわりありません。

老いぼれたライオンのじんざの火の輪くぐりの芸を見て、男の子は、その気の抜けた芸を心配します。独りぼっちの男の子は、なんとなくさびしい芸をするライオンの見舞いに出かけます。

独りぼっちの男の子と老いたライオンのじんざは、すぐに心が通いあいます。男の子の無邪気な、じんざに対するあこがれは、老いたじんざに新しい力と勇気を与えます。

そして、じんざは、猛火の中から男の子を救い出して昇天してしまいます。

物語の前半は、老いぼれたじんざと男の子の心の交流を描いています。その中で、じんざの体には、アフリカの草原を走つた若き日の力がよみがえつてきます。

後半は、老いたじんざが、百獸の王と化し男の子を救出して昇天します。これは悲劇です。しかし、悲劇の中に救いがあります。古い先短いじんざは、サーク

スのライオンとして朽ち果てる日も近いのです。そのじんざに、男の子は偉大なる晴れの舞台を作つてあげたことになるわけです。

死を美しく迎えることは難しいことです。

「自分が生きるために、火の輪をくぐつてきたじんざが、他人（男の子）を救うために猛火の中に飛び込んだ。」というのが、この物語の美しさであると思います。じんざを変身させたのは、男の子のじんざに対するあこがれであるとも言えます。

サークัสが、子どもたちにはなやかで、どこかものさびしい思い出を残して他国へ立ち去ったあと、子どもたちは、自分たちの遊び場に、どこからか、むしろや繩を持ち出してきて、ブランコを作つたり、小屋をかけたりして、サークัสごっこをはじめます。竹の先に細い紐をつけ、ヒューパチツと鞭を鳴らしてみる。子どもたちは、たちまち、猛獣使いになります。犬など通りかかると、その犬こそいい迷惑です。

見することであると思います。

私も、老いたサークัสのライオンのじんざと同じです。もう若い頃の体力や気力はなくなりました。（園児とかけっこをしてみると、とてもついていけなくなりました。息をはずませて走るのをやめると、「園長先生、大丈夫？」と心配されるようになってしましました。）老いたライオンは、アフリカの草原を走る若い日の夢をみます。私の年齢になるとそのようなライオンの心に共感を覚えます。

私に、若き日の力を与えてもらえたなら、サークัสのライオンのように燃え上がりたいとさえ思うのですが…。

三 立 案

まず、区画から考えてみたいと思います。長文ですが、区画は、あまり迷わないですむ文章です。

- ①テントのかげの箱の中　火の輪くぐりをしながら
- ②ぶ台の真ん中　　日に日に老していく
- ③外へ出た　　じんざ
- ④家まで送つて

読むということは、読み手の体験（思い出）が、文章の中にはまりこむことで、読者は読みながら、文章の中にこれまで生きてきた自分の姿を、あらためて発

オニになり、火の粉の中で、金色に光るライオンとなつて昇天します。

目が白くにぎり、老いぼれたサーカスのライオンとして終わるのを、再び若い頃の、アフリカの草原を走るライオンにしたのは、そして、金色に光るライオンとなつて昇天したのは、だれの力だったか。ということを扱えばいいことになります。

次に題目を考えます。これは、題目「サークスのライオン」の姿が、①②③と変容していくことを押さえればいいわけです。ただ、この変容を扱う前に、ライオンの「火の輪くぐり」は、サー

カスの出し物の中で、一番の花形の演技であることを補説しておくといいと思います。猛獣使いであるおじさんにとっても、それが、めつきり迫力がなくなつてきたわけです。ところが、そこに男の子があらわれて、

来る日も来る日も、火の輪をぐぐるだけ、同じことの繰り返し、誰でもいやになり、やる気がなくなつてくるものです。それは、なおさらライオンの老いぼれに拍車をかけることになります。

そんな、気乗りのしない年老いたライオンを心配して見ていたのは、男の子だったわけです。ライオンは、この男の子の言葉によって、やさしさによって甦ります。

② アフリカの草原を走ったときのように……走る
　　① おいぼれライオン
　　② おいぼれのライオンに活力を与えたことになります。

③ 金色に光る……空高くかけ上るライオン
サークัสのライオンが、アフリカの草原を走るライ

さて、子どもたちに、好きな所はどこか、尋ねてみるといいと思います。

① 男の子とライオンのあたたかい出会い

② 男の子とライオンの心の交流

③ 男の子救出に向うじんざの勇姿

④ ライオンじんざの昇天

になるのではないかと思います。その箇所を書き書きしてみると、

① 「ライオンがすきなのかね。」

「うん、大きさ。それなのに、ぼくたち屋間サーク

スを見たときは、何だかしょげていたの。だから、お見まいにきたんだよ。」

じんざは、ぐぐつとむねのあたりがあつくなつた。

② 「お母さんがね、もうじきたい院するんだよ。それにおこづかいもたまつたんだ。あしたサークスに

来るよ。火の輪をくぐるのを見に来るよ。」

男の子が帰って行くと、じんざの体に力がこもつた。目がぴかっと光った。

「……ようし、あした、わしはわかるときのように、火の輪を五つにしてくぐりぬけてやろう。」

③ 風にひるがえるテントのすき間から外を見ると、

男の子のアパートあたりが、ぼうつと赤い。ライオ

ンの体がぐうんと大きくなつた。

じんざは、古くなつたおりをぶちこわして、まつしぐらに外へ走りでた。足のいたいのもわすれて、むかし、アフリカの草原を走つた時のように、じんざはひとかたまりの風になつてすつとんでいく。

④ それを聞いたライオンのじんざはひとりでつぶやいた。

「なあに。わしは火にはなれていますのじや。」

じんざは力のかぎりほえた。

ウォーム

その声で気がついた……登つてきた男の人にやつとのことで子どもをわたすと、じんざはりよう手で目をおさえた。けむりのために、もう何も見えない。

⑤ やがて、人々の前に、ひとかたまりのほのおがまい上がつた。そして、ほのおはみるみるライオンの形になつて、空高くかけ上がつた。ぴかぴかにかがやくじんざだった。

もう、さつきまでのすすけた色ではなかつた。

⑥ ライオンのきよくげいはさびしかつた。おじさんはひとりでチタツとむちをならした。五つの火のわはめらめらともえていた。だが、くぐりぬけるライ

オンのすがたはなかつた。それでも、お客はいつし

ようけんめいに手をたたいた。

になりましよう。たぶん、この書き抜いた文が、一
読後に子供の心にひびくところではないかと思いま
す。ここは、第二次指導の板書の手がかりにもなり
ます。

二とく、六とくの細かな立案、発問の工夫について
は、ここでは省略したいと思います。

平成十二年二月

土曜会での資料

教材研究

サークัสのライオンを読んで

宮沢小 笠原 昭司

「町はずれの広場に、サークัสがやつてきた。……」

冒頭の一一行に私の幼い日の思い出はよみがえる。

旅のつばくろ さみしかないか／おれもさみしいサ
ークス暮らし／とんぼがえりで今年もくれて／知ら
ぬ他国の花をみた／朝は朝霧 夕は夜霧／泣いちや
いけないクラリオネット／ながれながれる浮きもの
花は／明日も咲きましょあの町で

昭和六年ドイツのハーゲンベック動物園のサークัส
団が来朝したときに作られた歌だという。（それ以前
はサークัสという語はなくて曲馬団といわれていた。）

サークัส（circus）とは円形競技場の意であ
る。テントを使って移動するのは映画でおなじみの米
国のリングリングサークัส（汽車で米大陸を移動）ミ
ルズブラザーズ（トラックをつらねて大陸を移動）が
有名。日本では昭和六年後にサークัสの語が定着した。

サークัสの歌と共に、私の町にも互市の三日間、サ

一カス小屋がたつた。割引券と五銭白銅貨をにぎりしめて、胸をはずませて出かけたことを思い出す。

子供はサークスが好きである。荒れた広場は、ふだんは野球やかくれんぼやじんとりなどの遊び場である。その広場に、ある日、テント小屋がかけられる。若い衆が丸太をわら縄で手ぎわよくしばりながら、小屋を作っていく。その身軽さに子供は目をみはつて感心する。

サークスは、子供の夢であり、あこがれである。

(ソ連では、サークスは子供に「大胆・細心・勇気の人生」を教えるものとしている。)

子供は、人間の芸にも動物の芸にも同じように大きな拍手をおくる。恐ろしい猛獣も子供にとつては、人間と同じになる。

老いぼれたライオンのじんざの火の輪ぐぐりの芸をみて、男の子はその気の抜けた芸を心配する。ひとりぼつちの男の子は、なんとなくさびしい芸をするライオンの見舞いに出かける。

ひとりぼつちの男の子と老いたじんざは、すぐ心が通いあう。男の子の無邪気な、じんざに対するあこがれは、老いたじんざに新しい力と勇気を与える。

じんざは、猛火の中から男の子を救い出して昇天する。

物語の前半は、老いぼれたじんざと男の子の心の交流を描く。老いぼれたじんざの体に、草原を走った若き日の力がよみがえる。

後半は、老いたじんざが、百獣の王と化し、男の子を救出して、昇天する。悲劇である。しかし悲劇の中に救いがある。

老い先短いじんざはサークスのライオンとして朽ち果てる日も近い。そのじんざに、男の子は偉大なる晴れの舞台をつくってくれた。

死を美しく迎えることはむずかしい。「自分が生きるために、火の輪をくぐってきたじんざが、他人（男の子）を救うために猛火の中に飛び込んだ。」というのが、この物語の美しさであると思う。じんざを変身させたのは男の子のじんざに対するあこがれである。

サークスが子供たちに、はなやかでどこかものさびしい思い出を残して他国へ立ち去ったあと、子供たちは、自分たちの遊び場に、どこからか、むしろや繩な

どを持ち出してきて、ブランコを作つたり、小屋をかけたりして、サーカスごっこをはじめる。

竹の先に細いひもをつけ、ヒューパチッとむちを鳴らしてみる。子供たちは猛獣つかいになる。犬など通りかかったら、その犬こそいい迷惑である。

が、場面は十一である。)

さし絵にあわせて、全文を十一区画にしてみると、

その場面ごとに、じんざの行為がでてくる。

1 ねむっている

2 くぐりぬける

3 外へ出た

4 もぐもぐたずねた

5 おくつて行く

6 うなづいて聞いていた

7 外へ走り出た

8 火の中へとびこんだ

9 ほえた

10 空高くかけ上がった

11 ライオンのすがたはなかつた

読むということには、読み手の体験（思い出）が、文章の中にはいりこむ。読者は読みながら文章の中に今までの自分の生き方を発見する。

私も、老いたサーカスのじんざと同じである。もう若いころの体力や気力はなくなつた。（一年生とかけつこをしてやつと同じぐらいである。）老いたライオンは、アフリカの草原を走る若い日の夢を見る。私の年齢になると、そのライオンの心に共感をおぼえる。

私に若き日の力を与えてくれる男の子が現れれないかと思う。その力を与えてもらえたなら、サーカスのライオンのように燃えあがりたいとさえ思う。

◎ 文章のくみたて

文章の事実をたどつてみると、十一の場面になる。さし絵が十一場面になつてゐる。（さし絵は十二ある

第六区画で、老いたライオンの目は光り、体には草原を走つたころの力がよみがえる。第四区画は、男の子と老いたじんざの出会いである。サーカスのライオンが、草原を風のように走るライオンに変る場面と言える。

第八区画から第十区画までは、若き日のライオンの勇姿を描いていると言えよう。いや、それ以上の姿が

描かれている。

◎題目について

「サークスのライオン」には二つの姿があると思う。

前述のように、

1、自分が生きるために、火の輪をくぐりながら日に

日に老いていくライオンのじんざ。

2、自分を心から愛している男の子を救うために猛火

の中とびこむ草原のライオンのじんざ。

題目はこの二つの姿を象徴している。題目をほぐし

てみると、全文がはつきりしてくる。

◎文章の抜き書き

文章を具体的に読み取るために、抜き書きをしてみる。

○ ねむつている時は、いつもアフリカのゆめを見た。

ゆめの中に、お父さんやお母さんや兄さんたちがあらわれた。草原の中を、じんざは風のように走っていた。

(第一区画)

○ 自分の番がくると、じんざはのそりと立ち上がる。

(第二区画)

○ 「たいくつかね。ねてばかりいるから、いつの間

にか、おまえの目も白くにじつてしまつたよ。今日のジャンプなんて、元気がなかつたぞ。」「そうともさ。毎日、同じことばかりやつているうちに、わしはおいぼれたよ。」(第三区画)
「ライオンがすきなんかね。」「うん、大きさ。それなのに、ぼくたち昼間サークスを見たときは、なんだかしょげていたの。だから、おみまいに来たんだよ。」「じんざは、ぐぐつとむねのあたりがあつくなつた。(第四区画)

○ ジンザは、もうねむらないでまつっていた。

「お母さんがね、もうじきたい院するんだよ。それにおこづかいもたまつたんだ。あしたサークスに来るよ。火のわをくぐるのを見に来るよ。」

男の子が帰つて行くと、じんざの体に力がこもつた。目がぴかっと光つた。

「……ようし、あした、わしはわかい時のように、火のわを五つにしてくぐりぬけてやろう。」(第六区画)

○ 風にひるがえるテントのすき間から外を見ると、男の子のアパートあたりが、ぼうつと赤い。ライオンの体がぐうんと大きくなつた。

じんざは、古くなつたおりをぶちこわして、まつしぐらに外へ走り出た。足のいたいのもわすれて、むかし、アフリカの草原を走つた時のように、じんざはひとかたまりの風になつてすっとんで行く。

(第七区画)

- それを聞いたライオンのじんざはひとりでつぶやいた。

「なあに。わしは火にはなれていますのじや。」

(第八区画)

- じんざは力のかぎりほえた。

ウォーッ

その声で気がついた……登つて来た男の人によつとのことで子供をわたすと、じんざはりよう手で目をおさえた。けむりのために、もう何も見えない。

(第九区画)

十月の教材の取り扱いは、年間の配当時間より二割は少なめに考えて計画を立てておいたほうがいいと思う。そのためには、文章の抜き書きをすると、どこに力点をおいて扱えばよいかはつきりする。

むしろだらだらと扱うよりは、要所をきちんと扱うほうが、子供の感銘も深く、自学の心も育つよう思う。

五つの火のわはめらめらともえていた。だが、くぐりぬけるライオンのすがたはなかつた。それでも、お客様はいつしようけんめいに手をたたいた。

(第十一区画)

- 時間配当

- やがて、人々の前に、ひとかたまりのほのおがまい上がつた。そして、ほのおはみるみるライオンの形になつて、空高くかけ上がつた。ぴかぴかにかがやくじんざだった。もう、さつきまでのすすけた色ではなかつた。
- ライオンのきよくげいはさびしかつた。おじさんはひとりでチタツとむちをならした。

一、通読と全文の概観

二時間

二、内容をよむ

五時間

(第十区画)

- | | | | |
|---|--------------|-------|-----|
| 1 | 第一区画・第二区画をよむ | | 一時間 |
| 2 | 第四区画～第六区画をよむ | | 一時間 |
| 3 | 第七区画・第八区画をよむ | | 一時間 |

4

第九区画・第十区画をよむ ······

3

ライオンじんざの昇天

5

第十一区画をよむ ······ 一時間

3

三つになるのではないかと考えられる。

三、おさらい

1 すきなところを書く

二時間

2 感想（すきなわけをかく） ······

一時間

3 おさらい

二時間

◎ 一、「のところは五時間をとつたが、三時間でも扱うことができる。二時間でもやれると思う。

男の子とライオンの心の交流（第四区画～第六区画）は、大事に読み取らせる必要がある。つぎは、サークスのライオンでなく、草原を走っていたころを思わせるライオンの姿（第七～第九区画）を読み取らせる。それにライオンの最後（第十区画）を読みとらせる。

◎ 感想文について

ライオンと男の子の出会いあたりが書きやすいのではないかと思う。ライオンの最後の場面や第十一区画が書けたら（単なる悲劇としてでなく）いいと思うが、三年生には難しいかも知れない。

昭和六十二年十月
古川市立宮沢小学校第三学年での御教壇後の
校内研修会で配布された資料

◎ 好きなところを書かせる。

どのあたりに、子供の関心が向くかによって、ちがつてくることは予想されるが、

- 1 男の子とライオンのあたたかい出会い
- 2 じんざの勇姿（男の子を救出する場面）